

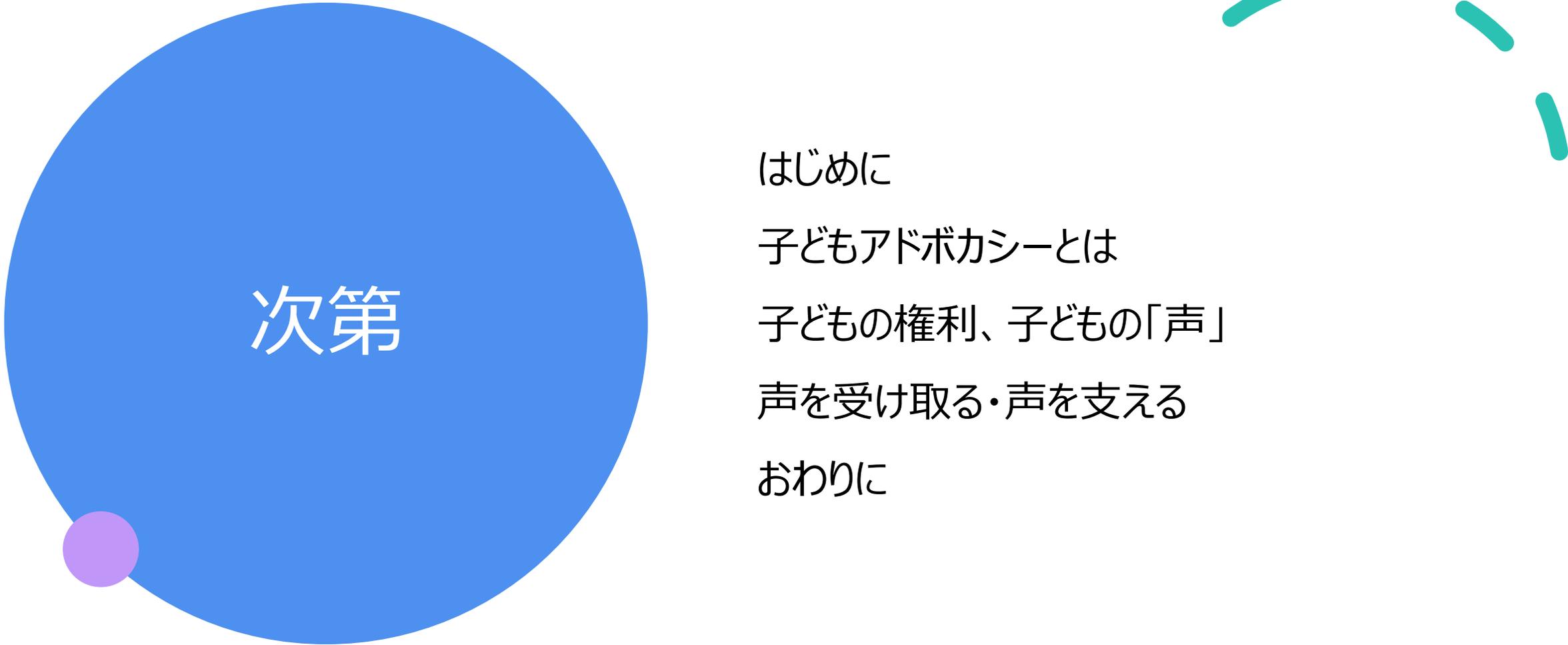
令和7年度盛岡市こども相談事業講演会
わたしたちの気持ちを聴いてね
～こどもも大人も地域みんなで元気になれる～

基調講演 1

ひとりの声を、ひとつの未来へ
子どもアドボカシーとは



一般社団法人ふたば代表理事 櫻 幸恵



次第

はじめに

子どもアドボカシーとは

子どもの権利、子どもの「声」

声を受け取る・声を支える

おわりに

はじめに

チャイルドケアセンターでの
出来事

子どもアドボカシーとは

- ・ 子ども主導で
弱い立場にある子ども、権利を侵害されている子どもが
思いを表すことを手伝うこと
本人の希望があれば代弁すること
意見の反映（形にする）を手伝うこと

* 2024年度

社会的養護下の子どもの「意見表明等支援事業」開始



子どもの権利、子どもの「声」

【子どもの権利条約】

1989年国連総会で採択 「権利を行使する主体としての子ども」

「子どもの権利」4つの原則

(子どもの権利条約より)



子どもの最善の利益

意見表明権

子どもにとって最もよいことを、子どもとともに考える

1994年条約批准 ▶ 2016年・2024年「改正児童福祉」施行、2023年「こども基本法」施行・「こども家庭庁」発足、
2024年 子どもの「意見聴取等措置」・「意見表明等支援事業」開始

意見表明権 = 意見を聴かれる権利・参加する権利

【子どもの権利条約第12条】

子どもは自分にかかわることについて意思・意向・意見を自由に表明することができる。大人はそれらを聴き、年齢や成熟に従って考慮する。それは正当に重視されなければならない。

子どもは「成長・発達の過程」
にある「権利主体」

話せる環境・話を聴く
大人の存在が重要

第12条(1項)

「意見を表明する権利」 the right to express a view

「その意見が相応に考慮される権利」 the right to have the view given due weight

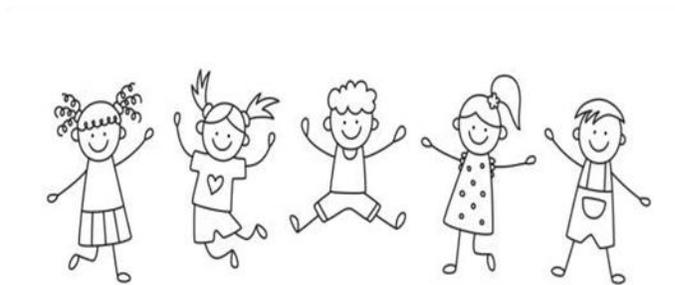
子どもの「声」 気持ち・意見や願いはさまざまな形で現れる 【views】

怒ったり

泣いたり

暴れたり

おどったり



絵に描いたり

無言だったり 内なる声だったり



子どもの声は聴かれてきたか

子どもの声は小さくて弱く、大人や社会に軽く扱われる

背景にある「アダルティズム」

子どもを劣っている未熟な存在として見下す・蔑視する態度

- ・時間がないから今はダメ
- ・子どものくせに
- ・心配しないで、あなたにはわからない事だから
- ・子どもに解決は無理でしょ



子どもの思い

- ・子どもは大人をおもんばかり
- ・子どもの思いは隠される
- ・子どもの思いは揺れ動く

子どもが声をあげにくい・あげられない
環境を大人がつくっている

Q 日本の子どもは自分の意見や気持ちを十分に聴かれているか？

【意見表明権】 内容をよく知っている (%)

日本8.0、米31.2、独21.9、仏31.4、スウェーデン33.2

【意見や気持ち】 聴いてもらえると感じている (%)

日本8.7、米18.0、独28.3、仏20.1、スウェーデン32.8

令和5年度こども家庭庁「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査」 p52. p53

対象：13歳–29歳までの男女、サンプル数：各国1,000、時期：2023(R5)年11月–12月

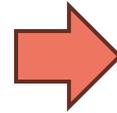
なぜ声を聴くことが必要なのか

- 声が聴かれ、考慮される

自分は社会にとって
意味がある存在

ここにいても
大丈夫

叶っても・叶わな
くても納得できる



Well-being

(ありのままの自分で居られる心地よい状態)

自己肯定感

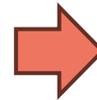
レジリエンス (回復力・乗り越える力)

主体性

自分に関わる大切なことはちゃんと自分で決められる

目標に向かって主体的に行動できる

自ら社会に関わって良い影響を与えられる





「声」を受け取る

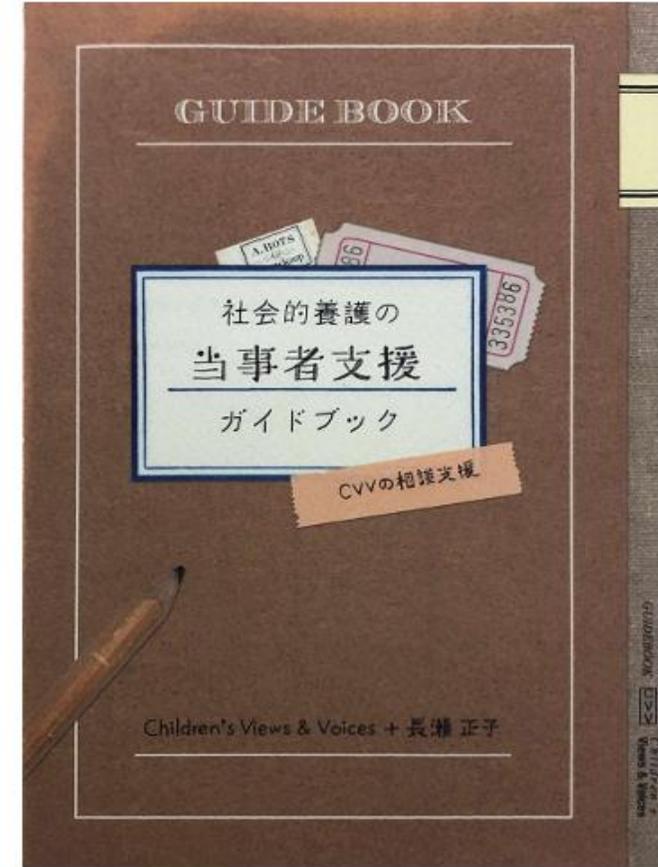
- 「言葉にできないしんどさ」 抵抗はメッセージ
- 「言葉以外のたくさんのサイン」を受け取る
- 「ことばにしなくてもいい場所」
- 「聴けていないかもしれない」と気づいていること

声をあげる＝心のドアを開くこと

心の扉のドアノブは、内側にしかついていないから
外からはノックしかできない。こじ開けると壊れてしまう。
開けられるのは自分だけ



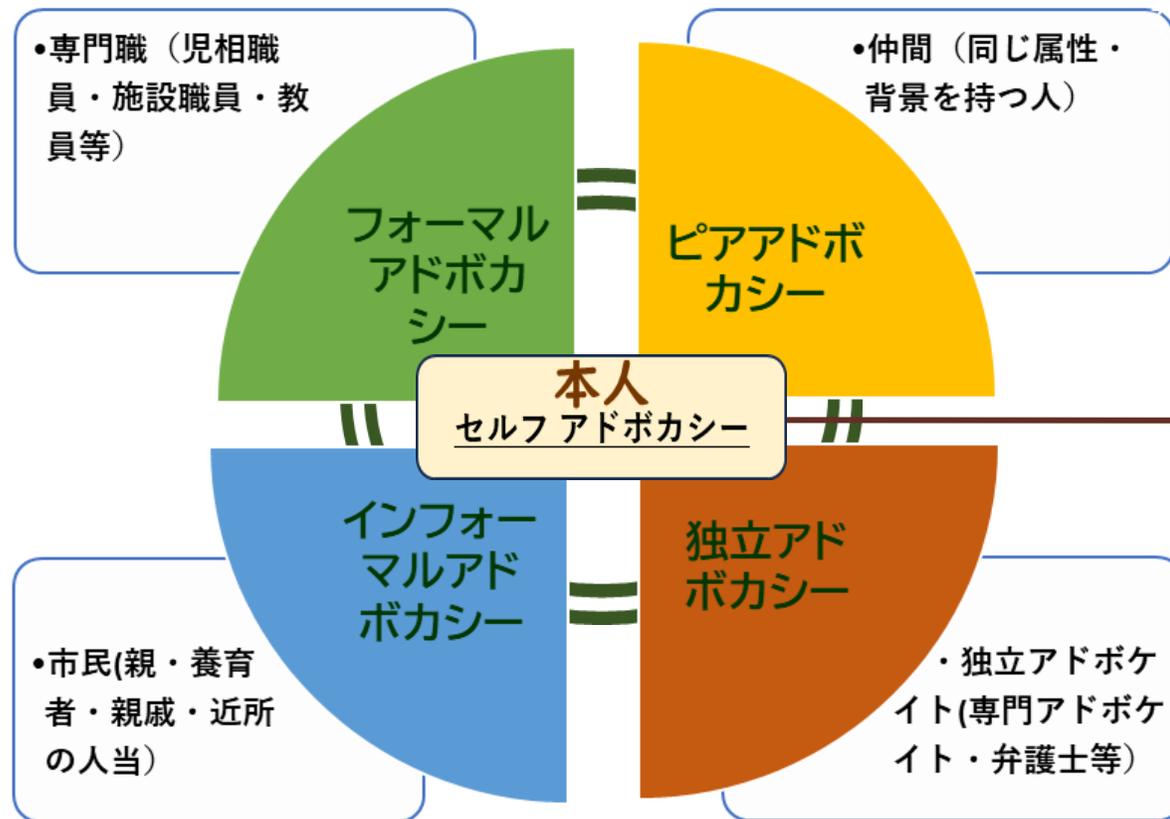
りさり「心の扉」



Children's Views & Voices
「社会的養護の当事者支援ガイドブック」

声を支える 子どもアドボカシーの担い手

さまざまな方がアドボケイトの担い手。本人の「声」を待つ・聴く・拓く・支える・実現を手伝う。日常の中での大人のかかわりが子どもの権利を支える。



▶子どもアドボカシーは
子ども自身が自分の思い、意見、ニーズ、実現したいことを周囲の大人や社会に表明し、自らが権利を行使できる「セルフアドボカシー」の形成を目指す

▶担い手 (子どもアドボケイト) は
* 「声」を聴き、「子ども主導」で一緒に考える
* 伴走し、必要なら子どもの「マイク」になる
* 「伝える」手伝いをする
* 秘密にしたいときには「秘密を守る」(例外アリ)

子どもアドボカシー =子どもをエンパワーすること

大人が子どもを「守るべき弱い存在」とだけ見るのではなく、「ひとりの人間として信頼し、自分で人生を切り拓く力を育む」という向き合い方

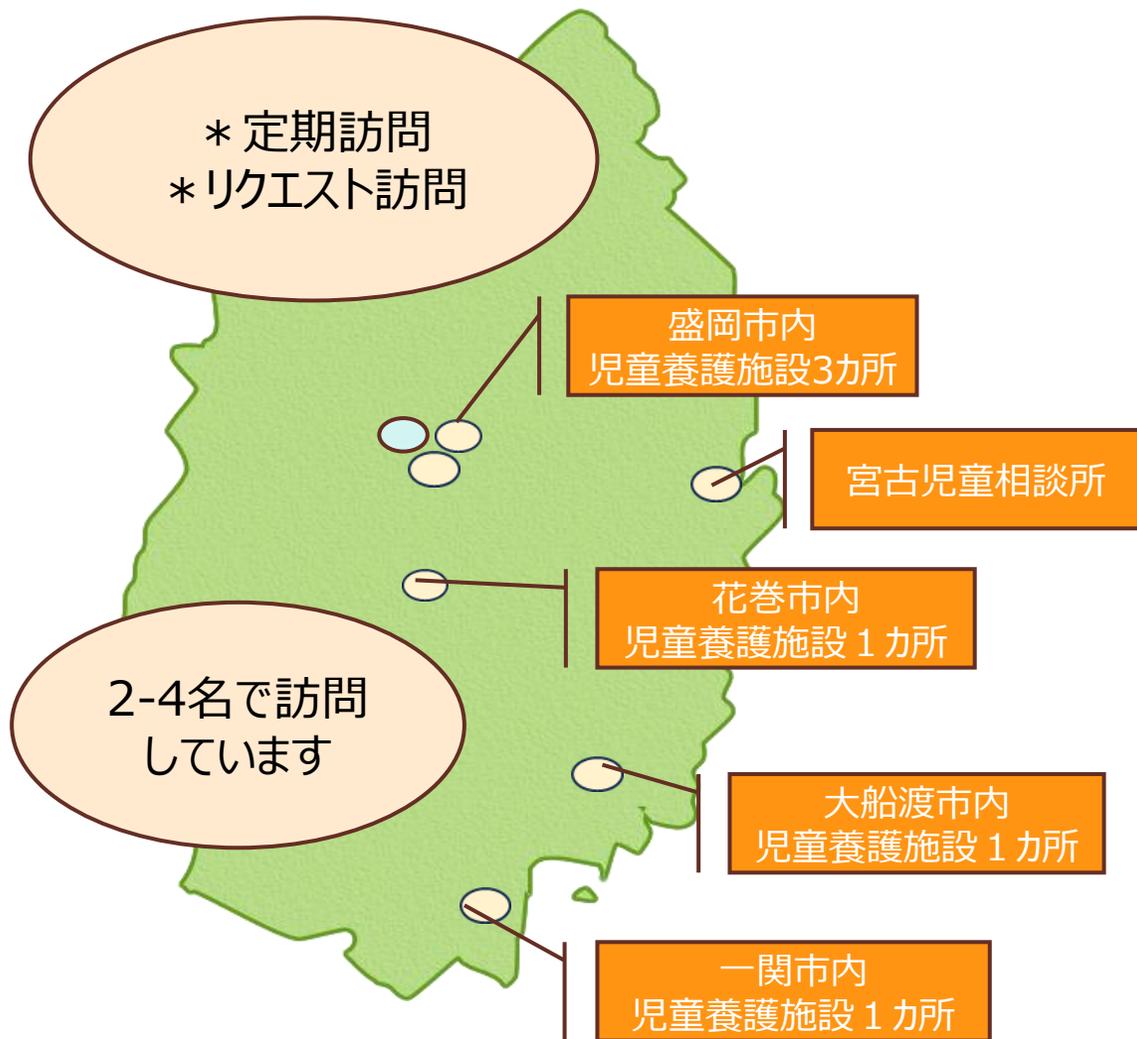
「私たちのことを私たち抜きに決めないで」

- 「声」を聴き、対等に接する
- 「自分で決める」機会
- 「結果」より「プロセス」
- 環境を整える、壁を取り払う・・・社会モデル

子どもは大人と共に学ぶ

«子どもの「ために」ではなく、子どもと「ともに」»

活動紹介 (R7年度)



初めの出会い 遊びなどを通して信頼構築を図ります(基盤活動)

スタート 言いたいけれど、一人ではなかなか言えない



悩んでいること・困っていること・伝えたいこと

(生活のこと、いえのこと、友達のこと、学校のこと、将来のこと etc)



アドボケイトが話を聴きます(本来活動) あくまでも子どもの希望で、

「その話 どうしたい？」 *秘密は守ります

「だれにも言わなくていい」
「聴いてもらうだけでいいんだ」

「だれかに伝えたいな」
「困っていること解決したい」

「どんなふうに伝えようか？」

解決に向けて いつ(希望の日) どこで(話をしたいところ)

だれに(気持ちや意見を伝えたい人) どのように(話をする。手紙を書くなど)

*一人で言えないときはアドボケイトと一緒にいてお手伝いします。代わりに話をすることもできます。

*どう書いていいかわからないときは、アドボケイトと一緒に考えたり、書くお手伝いをします。

*子どもの思いや意見に沿い、子どもの思いや意見を必ずメモして示し、内容を確認しながらすすめます。

フィードバック 結果は必ず子どもに伝えられます。

おわりに ～ ひとりの声、一つの未来

子どもの人生は子どものもの

ひとり一人が尊重され、未来に向けて自分なりの一歩を踏みだせるように

効率優先、排除や不寛容ではなく、
お互いがゆっくり向き合って、違いを楽しむ、権利を尊重する
大人も子どもも暮らしやすい地域



「大人になるのも悪くないな」
と思える社会へ

ご清聴
ありがとうございました



参考文献

- ・栄留里美・長瀬正子・永野咲 著，明石書店，2021年
「子どもアドボカシーと当事者参加のモヤモヤとこれから」
- ・堀正嗣，明石書店，2020年
「子どもアドボケイト養成講座－子どもの声を聴き権利を守るために」
- ・吉川徹 編，日本評論社，2023年
「こころの科学 232 子どもの声を聴く－支援の現場から『子どもの権利』を考える」
- ・以上の他、データ引用は文中に出典明記